4．原稿の締切などは、そのつど「大学史研究通信」に掲載します。常例では、執筆希望の申込が毎年４月中頃まで、原稿の締切が５月末頃となっています。
（今回は上記の通りです）

5．原稿送付、お問合せは、第１７号については、事務局の坂本まで（連絡先は最終ページ参照）お願いいたします。

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第 14 号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80 円×部数＋郵送料（1 部の場合 90 円、2 部以上は 120 円）分の切手を同封の上、編集担当進藤宛までご請求下さい。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記　いつも発送の遅延、編集のミスに悩まされております。今回は比較的スムーズに編集作業が進みましたが、梶会員の原稿の掲載もれが発覚し、編集担当者の能力のなさを露呈してしまいました。これは事実ですからどうしようもありませんが、梶会員にかけたご迷惑を考えると、なんとお詫びをしていいものかわかりません。この場であらためて謝罪させていただきます。誠に申し訳ございませんでした。

２０００年度も終わり、いよいよ新しい季節がスタートします。前号より会員の関係した新刊書を紹介するコーナーを設けました。担当者ひとりではおのずと限界がありますので、会員諸氏からの情報提供をお待ちしております。（進藤記）

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。
連絡先〒562-8558　大阪外国語大学外国語学部　進藤　修一研究室内
TEL/FAX 0727-30-5355　EMAIL　sshindo@pop13.odn.ne.jp
『大学史研究通信』第２６号は、５月３１日発行予定です。

大学史研究会事務局

〒192-0003　八王子市丹木町 1-236　創価大学教育学部　坂本辰朗研究室内　大学史研究会
TEL 0426-91-4602　FAX 0426-91-9309　EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

大学史研究会事務局員（五十音順）

阿曽沼　明裕（名古屋大学）
大川　一毅　（早稲田大学）
児玉　善仁　（帝京大学）
進藤　修一　（大阪外国語大学）
橋本　鉱市　（大学評価・学位授与機構）
飯野　靖夫　（日本鯨類研究所）
木戸　裕　（国立国会図書館）
坂本　辰朗　（創価大学）
塚原　修一　（国立教育研究所）

大学史研究通信

第２５号、2001 年３月 31 日（土）
大学史研究会

第２５号の内容：新入会員、会員ニュース・新入会員自己紹介・例会報告・大学史編纂ニュース・事務局通信担当からのお知らせ・『大学史研究』第 17 号原稿募集要領・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

新入会員（敬称略）

熊澤　恵里子（東京農業大学）
[redacted]
日本教育史・幕末維新期における教育の近代化

栗原　詩子（東京芸術大学）
[redacted]
音楽学・フランス近代史（19 世紀）・フランス文学

三宅　博
[redacted]
大学史・ルソーの教育思想

会員ニュース

種田　明　会員（所属・住所変更）
新所属先：静岡文化芸術大学（文化政策学部）
〒430-8533 浜松市野口町１７９４－１　　研究室８０３
Tel.053-457-6169
E-mail [redacted]
新住所（連絡先）：同上

瀧井　一博　会員（所属変更）
新所属先：神戸商科大学助教授

吉野　剛弘　会員（住所変更）
新住所：[redacted]

新入会員自己紹介

梶 雅範（東京工業大学）

大学史研究会の存在はずいぶん前から聞いていましたが、昨年暮に初めて研究セミナーに参加して入会しました。私は科学史を専攻しています。主としてロシアと日本における化学の歴史を研究しています。ロシアでは 1868 年にロシア化学会が創立され、日本では 1878 年（明治 11 年）に東京化学会がつくられ、両国とも、その初期の会員は、その大部分が大学を中心とする高等教育機関に職をもっていました。そんな関係から、高等教育機関の歴史的研究は重要だとかねがね考えていました。大学史研究会に参加して、他の研究者の方々の多くの個別研究や研究方法論を学ぶことができればと思っています。

（梶会員の原稿は、昨年 10 月末時点に受け取っておりましたが、編集担当進藤のミスにより、掲載漏れとなっておりました。梶会員には多大なご迷惑をおかけいたしました。ここに陳謝いたします）

『大学史研究』投稿・執筆要領

１．「大学史研究」への会員の投稿を歓迎します。

２．和文原稿は２０～３０枚（４００字詰換算）の分量を標準とし、英文題名と英文著者名を記した別紙を添付するものとします。和文でない原稿も同様の分量（刷上り６～９頁）を標準とし、和文題名と和文著者名を記した別紙を添付するものとします。また、読者の便宜のため、充実した和文要旨を添付することをお勧めします。

３．パソコン、ワープロを利用できる方は下記要領で原稿を作成して、フロッピーと印刷出力をお送りください。事務局で一括して印刷しなおして版下を作成します。フロッピーは返却します。手書きの方は、入力作業に多少の時間を要しますので早めにご提出ねがいます。

（１）ワード（マイクロソフト）あるいは一太郎（ジャスト・システム）の通常文書で保存したフロッピーを希望します。あるいはＭＳ－ＤＯＳ文書形式でも結構です。それが難しい場合は、適宜な形式で保存したフロッピーをお送りくだされば事務局で変換をこころみます。

（２）用紙はＡ４を縦に使用して横書き、字詰めは自由ですが、おおむね４０字３５行とします（刷り上がりがそうなるとは限りません）。

（３）第１頁の最初の５行ほどに表題と著者名（カッコ内に所属機関と部局名）を書き、１頁目にかぎり本文は６行目から書きます。

（４）図表は別紙とし、本文の挿入個所に図表をレイアウトする空白をあけます。図表はそのまま製版します。

（５）章、節の番号は大きい方から順に、I. II. III. ……、１．２．３．……、（１）（２）（３）……とします。

（６）使用する文字種は、全角の漢字かな英数字、半角の英数字、注番号に使う上付き数字などとします。英数字は、１文字（１桁）の場合は全角文字、２文字（２桁）以上連続する場合は半角文字を原則とします。外字の使用は控えてください。

なお、ＭＳ－ＤＯＳ文書形式のファイルの場合は、イタリック、アンダーライン、あみかけなどは、印刷出力に指定を書き入れてください。

（７）注と文献表は論文の末尾につけます。注番号は上付き数字の 1, 2, 3, ……とします。

邦語文献は、書名、雑誌名を『』、論文名を「」でくくります。
外国語文献の書名、雑誌名は、イタリックを指定してください。

なお、本年４月からの情報公開法実施に際して、大学附属図書館等は「情報公開法の規定とは別に」資料提供を行える施設になることが予定されている。大学史料室も現在その指定を受けるべく準備中であるが、そのための要件として一般の利用を認める「利用規程」と、一般の閲覧に供されている「目録」の存在が挙げられている。大学史(資)料室が受け入れる史料の中には半現用文書等が含まれる場合がある。その保存・利用のあり方については今後の課題であるが、公刊された印刷物等、先ずは公開可能なものから目録化を行うということも、アーカイヴスを目指す組織においては大切な仕事なのではないだろうか。

原稿募集

『大学史研究通信』第 25 号は 2001 年 3 月 31 日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿・お問い合わせ等は通信担当者の進藤までお願いいたします。連絡先は最終ページをご覧ください。

住所・所属変更届のお願い

住所や所属（昇任・学位取得も含む）に変更のある会員は「通信」担当者進藤までご一報くださるようお願いいたします。教授・研究のために海外にご滞在予定のかたも、海外での連絡先をお教えいただけましたら幸いです。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願いいたします。

『大学史研究』第 17 号の原稿募集のお知らせ

『大学史研究』第 17 号の原稿を募集いたします。投稿規定をご参照のうえ、ふるってご応募くださいますようご案内申し上げます。投稿をご希望の方は、下記投稿・執筆要領をご参照のうえ、**2001 年 5 月 7 日**までに事務局に表題をお知らせください。原稿締切は **2001 年 7 月 31 日（厳守）**とします。なお、発行予定を厳守するために、締め切り以降編集部に届いた原稿は事情を問わず次号送りとさせていただきますのでご了承いただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

＜例会報告＞

大学史研究会 2001 年第 1 回例会報告

「戦前の台北帝国大学における女性卒業生―中井政寿（旧姓大森）を中心に―」

森岡ゆかり（同志社女子大学嘱託講師）

本報告は戦前の台北帝国大学における女性卒業生について紹介することを目的としている。特に最初の女性卒業生となった中井政寿（旧姓大森）について、台北帝国大学に入学するまでの経緯、大学での学習成果は卒業後如何に生かされたかなどを、本人の執筆資料、家族・もと同僚への聴取り調査等に基づいて紹介し、台北帝国大学についての研究の端緒とするものである。

報告に先立ち、中国文学・比較文化学専攻の報告者が台北帝国大学研究に着手した経緯を説明した。まず、報告者は最近、文学と書道の学際的分野の研究をすすめており、この分野の先学である神田喜一郎が、1929 年から 1945 年まで台北帝国大学に在任し、台北時代の業績は、戦後の日本における中国文学・日中比較文学研究に多大な貢献をしたことから、台北帝大の学術環境がいかなるものであったか関心を抱くにいたったことを述べた。次に報告者は同志社女子大学で中国語を教えており、台北帝国大学最初の女性卒業生が同志社女学校専門学部出身者と知って、親近感を抱き調査する意欲を持ったことを述べた。

報告は大きく三つの部分にわけられた。一、台北帝国大学の概略、二、台北帝国大学入学・在籍・卒業の女子学生の紹介、三、最初の女子学生中井政寿（旧姓大森）についてである。

一、台北帝国大学については、以下三点にしぼって概括的な紹介をした。(1) 台北帝国大学の創設の意図について(2)“内地”の大学との基本的な違い。台北帝国大学の制度上の特異性は「(帝国大学）令中、文部大臣ノ職務ハ台湾総督之ヲ行フ」という一点で、その他は“内地”の大学と差異がないこと。(3) 台北帝国大学の設立準備から消滅するまでの沿革史。

二、台北帝国大学の入学・在籍・卒業の女子学生については、『台北帝国大学一覧』(1928 年～1944 年）と、『Academia－台北帝国大学研究通訊』第二号（台大台湾研究社発行、1997 年）所載の調査報告等に基づき、学部卒業した者、短期間聴講生として在籍した者、選科生などを紹介した。中井政寿（旧姓大森）や張美恵のように女性であることが判明している者以外については、さしあたって「○○子」という名で女性である可能性がきわめて高い名の人物を抽出したが、今後の調査を要する。ただし、大森政寿、石本君子については入学・卒業年度、出身校だけでなく、卒業論文の題目も判明した。出身校は「同志社女学校専門部」「津田英学塾」「東京女子大学」など多岐にわたっているが、彼女たち女子専門学校出身者が台北帝大の女性受け入れ事実をどのように知り、受

験に挑んだのか、研究課題として残されている。大森政寿の入学は婦女新聞第1610号（1931年4月19日）でも紹介されており、話題として大きく取り上げられたことが後進を生む要因の一つと言えよう。

三、台北帝国大学最初に入学し、最初の卒業生となった中井政寿（旧姓大森）について、台北帝国大学入学までの学校歴と、卒業後、学習成果がどのように現れたかを中心に紹介した。ここでは、まず略歴をあげ、次に研究報告の概略を説明する。

1909（明治42）年9月14日　高知県幡多郡にて誕生。
1919（大正8）年　台北師範附属小学校　転入。父政春は台湾総督府購買部主事、及び理事として勤務。敗戦まで台北在住。
1922（大正11）年　台北第一高等女学校入学
1926（大正15、昭和元）年　台北第一高等女学校卒業。東京女高師を受験するが不合格。
1926（大正15、昭和元）年　同志社女学校専門学部英文科入学。予科に1年在学（台北第一高女が四年制であったため）
1927（昭和2）年1月30日　同志社教会において堀貞一牧師から洗礼をうける。
1930（昭和5）年　同志社女学校専門学部卒業
1930（昭和5）年　台北帝国大学聴講生
1931（昭和6）年　台北帝国大学文政学部英文科入学。指導教官は矢野峰人。
1934（昭和9）年　台北帝国大学卒業。　卒業論文は「女性の権利の擁護について」（On "A Vindication of the Right of Woman"）（英文、タイプ打ち）
1934（昭和9）年　麹町女学校、川崎高等女学校（現在、県立川崎高）で英語教師
1939（昭和14）年　台北帝大英文学研究室副手、助手
1943（昭和18）年12月　台北帝大法哲学講座教授だった中井淳中井淳（1903—1954）と結婚。中井淳は40歳。政寿は助手を退職
1946（昭和21）年4月　台湾より引揚げる。高知の親戚宅等に寄寓。
1946（昭和21）年9月　中井淳、関西学院大教授に就任し、西宮に転居。
1946（昭和21）年9月　長男　清誕生。
1949（昭和24）年　長女　寿美誕生。
1954（昭和29）年1月1日　夫淳病没。享年50歳。
1954（昭和29）年4月　関西学院大学図書館に就職。
1967（昭和42）年　図書館司書課主任に昇進。

要約すると「①独立の機関であること。②専任のアーキビストを配置すること。③充分な場所を確保すること。④常設の委員会を設置すること。⑤九大に関する史料を恒常的に収集・整理することを目的とし、その活動を保証すること。具体的には学内諸文書の廃棄等の情報が史料室に提供され、収集・保存を容易ならしめるようなシステムをつくること。」というものであり、これらの条件を満たすものとして大学史料室の設置が要求された。九大大学史料室関連の最も基本的な文書であり、その結果、翌92年1月の評議会で「九州大学史料収集・保存に関する委員会」(全学委員で構成)が設置され、現在、大学史料室の基本方針は同委員会において決定されている。

大学史料室自体は、全学委員会より少し遅れた92年12月に始まった。構成員は上記の史料収集・保存委員会委員長が兼任する室長と、専任講師1、兼任教官6、及び事務補佐員2名からなる。主な業務として、学内文書を始めとする史料の収集とその整理、及びその方法等についての調査研究、大学アーカイヴス等についての調査研究、大学史・大学論についての調査研究を行っているが、最近では全学共通教育科目の「九州大学の歴史」(ゼミ)、「大学とは何か—ともに考える—」(講義)も行っている。このほか共同研究を組織し、「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」、「大学史料の情報資源化と大学アーカイヴスのシステム開発に関する基礎的研究」ほか、計4つの共同研究を行った。なお、刊行物として『大学史料叢書』(現在第9輯)と「大学史料室ニュース」(現在第17号)を創刊し、ほかに報告書、所蔵文書・写真目録等10数冊を出版した。最近では『九州大学大学史料室所蔵史料目録』(2000年7月。398頁)を刊行したが、これには大学史料室が所蔵する、九大関係の印刷物のほか他大学や文部省等諸団体関係の印刷物(例えば、学報、概要、広報、職員録等)も収めた。この目録は文書類に比し一見史料的価値が低く見える印刷物でも、網羅的に収集・整理し、比較・研究することで、貴重な史料となることを示してくれているように思う。

以上、九大の年史編集と大学史料室について振り返ってみたが、最後に今後の見通しについて少しふれておきたい。それは九大では今後10年の間に創立百周年とキャンパス移転という、二つの大きな出来事が予定されているからである。九大の大学史料室は年史編集室を改組して始まったが、将来的には大学アーカイヴスを目指している。したがって、この二つの事柄を念頭に置きながら、恒常的な大学アーカイヴスの設置を目指し活動する必要があろう。この点についての現状を記せば、先の収集・保存委員会が史料室関係の概算要求の母体でもあり、毎年ここから大学アーカイヴス新設の概算要求が行われている。言うまでもなくかなり厳しい状況ではあるが、全国的な公文書館設置や情報公開をめぐる動向を見ると、その重要性はますます高まっているものと思われる。

部)、榊原良朗氏(関西学院大学図書館)、渋谷武弘氏(関西学院大学産業研究所)、志保田昭子氏、田村美香氏、談謙氏(関西学院大学)、土屋尚子氏(京都大学大学院)、西野敬子氏、成田静香氏(関西学院大学文学部)、成瀬千枝子氏(関西学院大学大学院)、細川喜弘氏(高知新聞大阪支社)、宮澤正典氏(同志社女子大学)、棟方晃彦氏(日本キリスト教団西宮教会)、棟方千恵子氏(日本キリスト教団西宮教会)、山崎登茂子氏、山崎富美子氏(関西学院大学図書館)、呂楠氏(関西学院大学)。質疑応答の後、午後6時から8時半まで関西学院会館のレストラン「ポプラ」において懇親会が開催され11名が参加した。二次会は午後11時まで阪急電鉄西宮北口駅前のワインバー「マルコ・ポーロ」でおこなわれた。参加者6名。(2001年2月25日記)

＜大学史編纂ニュース＞

九州大学の大学史編纂と大学史料室の設置

折田　悦郎(九州大学大学史料室)

現在、多くの大学で沿革史の編纂が行われ、また公文書館や情報公開の流れを背景にして、大学アーカイヴスを目指した大学史(資)料室の設置が進みつつある。このような状況に前後して、九州大学でも1992年、従来の年史編集室を改組して大学史料室を設置したが、これらの経緯について、直接実務に関わった者として、少し記してみることにしたい。

先ず、九大の75年史編纂について簡単にふれておくと、1985年5月に年史編集室が置かれ、1992年3月までの約7年間に、写真集、史料編2冊、通史、別巻の5巻を刊行した。九大には既に1967年刊行の50年史全3巻があったが、今回の75年史の最大の特徴は、50年史以降を中心に、それも「大学紛争」について詳述したという点であろう。いわゆる「九大紛争」は全国有数の規模で展開され、現在においてもキャンパス移転等、大学のあり方に微妙な影響を与えているが、このような形の年史が編纂されたということは、編集開始当時の大学の考え方をよく示すものである。「紛争」の史料を収集しそれを記録しておくこと、このことが編集室に期待されたということは、編集室の性格を規定すると同時に、大学史料室の設置にも影響を与えたように思われる。

ところで、年史刊行が大詰めを迎えた1990年度になると、収集した史料の整理・保存が問題となってきた。そこで年史編集委員会と編集室は、その方法等について検討することにし、1年後の91年4月に「九州大学史料の収集・保存について－九州大学史料室設置の提言－」という報告書をまとめた。これは年史編集を振り返ると同時に、大学史(資)料室・アーカイヴスについての調査を行い、大学史料室がどうあるべきかという「提言」を行ったものである。その条件は、

1975（昭和50）年	関西学院大学図書館を退職。
1975（昭和50）年	関西学院大学神学部で聴講。
2001（平成13）年現在	自宅で静かな余生を送っている。

報告では第一に、台北帝国大学入学までの経緯について言及した。中井政寿は同志社女学校専門学部卒業前の進路調査で、就職希望欄に「無」と回答しているので、卒業後すぐ就職するつもりはなかったことがうかがえ、台北帝大への聴講、入学という経歴から鑑みて、進学志望であった可能性が高いことを指摘した。

1930（昭和5）年当時、女性がより大学で進学したいと志した時の受け入れ大学は、東北帝国大学、九州帝国大学などがあり、同志社女学校専門学部英文科の卒業生の場合、同志社大学への進学も可能であったが、中井政寿がいくつか考えうる選択肢の中で台北帝国大学を選んだのは台北一高女→“内地”の女子専門学校→台湾という、台北一高女生の一般的な移動ルートをなぞったものといえ、父母のいる地に所在する帝国大学入学を目指したといえると推察した。

大学側の示している入学優先順位（「台北帝国大学通則」〔『台北帝国大学一覧　昭和3年』〕）は、文政学部の場合、第一順位は高等学校高等科文科卒業者、第二順位は高等学校高等科理科卒業者、第三順位は欠員がある場合に学部で臨時に施行する入学試験の合格者となっていること、専門学校卒業生は第三順位で入学するが、台北帝国大学の場合、募集に対して高等学校からの入学者が少ないため毎年必ず入学試験が行われていたことを、所澤潤「専門学校卒業者と台北帝国大学―もう一つの大学受験世界」〔『地域史の可能性』所収、山川出版社、1997年〕の調査をふまえて再確認した。中井政寿の場合1930年には聴講生として学び、1931年に学部入学を果たしているが、1930年に入学試験を受験した形跡はなく、1931年に初めて受験して合格したことを紹介した。

第二に、卒業後彼女の学習成果が如何に生かされたかを述べた。特に1954年4月～1975年まで勤務した関西学院大学図書館での業績をあげ、学習成果との関連性を指摘した。関西学院大学図書館への就職は、関西学院大学教授であった夫中井淳の病没直後であり、幼い二人の子と未亡人の生活に配慮したものであったことが、中井淳の友人、恩師の追悼文からうかがえ、彼女の能力が見出されたものでないことを指摘。しかし、職場で得意の英語力を存分に使い、「洋書の中井さん」と言われるようになり、図書館初の主任、しかも関西学院大学で初の女性主任となったのは彼女の実力であることを述べた。在任時代の業績として佐藤、柴田、粟野の三種の特殊文庫目録を紹介し、特に柴田文庫はロバート・オウエンやメアリ・ウルストンクラーフト関係の文献を集めたもので、彼女の卒業論文で取り組んだテーマが仕事に直接生かされたものであったこと

を述べた。卒業論文「女性の権利の擁護について(On"A Vindication of the Right of Woman")は18世紀に男女の教育の平等を提唱したMary Wollstonecraftの名著『A Vindication of the Right of Woman』をテーマに選んだもので、指導教官矢野峰人(1893～1983)の評は「Passionを感じる」だったという(中井寿美氏談)ことを紹介し、卒業論文と業務が、稀有なことではあるが大いに関連を持ちえたことを指摘した。

1　湯川次義会員からのコメント

台北帝大・京城帝大への女性の入学について先行研究が見当たらない点に注目し、発表者の研究を評価。いわゆる"内地"の旧制大学の女性の入学について調査してきた見地から、台北帝大の女性の入学資格について"内地"の大学と差異がないことを指摘した。大正2年東北帝大への女性の入学は、女性の高等教育史の言わば前史であり、大正12年東北帝大、同志社大での女性受け入れが本格的な開始であることを紹介し、その潮流の中で、台北帝大の女性入学を位置づけられることを指摘した。また、発表者が、学習成果が卒業後どのように生かされたかを言及した点について学んだ点が多いことを述べた。

2　坂本辰朗会員からコメント

中井政寿のライフヒストリーを、バーバラ・ソロモン『アメリカ女性高等教育史』で取り上げている以下の四つの項目と重ね合わせて検討を加えた。

(1)大学入学をもとめる女性たちの闘争(access)

(2)大学生活の様々な側面(college life)

(3)大学で何を学んで将来生かすことができるようになったのか(after college)

(4)フェミニズムと女性教育の容易ならざる結びつき

検討内容は以下の通りである。

(1)なぜ台北だったのか。聴講生から正科生へと段階を経るのは一般的なことか、特殊なことか考察が必要である。戦略的であったのかもしれない。(2)学生新聞や、クラスミィーティングの議事録など、近い過去を語る同窓会の記録などを、大学生のナマの声を調査する必要がある。(3)関西学院大教授北野大吉が1930年ウォルストンクラフトについての著作を発表するが、中井政寿の卒論とどう違っているのか、また中井政寿は積極的に、論理的に語っているのか、卒論そのものの検討が必要である。(4)師弟関係、家族関係、女性たちの支援のネットワークなどを分析する必要がある。中井政寿の場合、キリスト教という宗教的ネットワークの存在がわかるが、例えば家族は積極的に娘を社会へおくり出そうとしたのか否か、検討が必要である。中井政寿自身が、あとの入学者にとってロールモデルとなったのではないか、書簡などが残っていると証明できよう。

最後に、発表者の報告は、高等教育史、女性史、大学史の、どういう観点から意味付けしていくのか今後の課題であることを述べた。

「2001年第1回例会記録」

早島　瑛(関西学院大学)

ことし最初の例会が2月9日、関西学院大学において開催され、30名をこえる参加があり盛会であった。

午後3時から

報告　森岡ゆかり 会員

「台北帝国大学最初の女性入学生中井政壽(旧姓大森)について」

コメンティター

1　湯川次義 会員「近代日本女性高等教育史の観点から」

2　坂本辰朗 会員「アメリカ女性高等教育史の観点から」

司会　早島 瑛 会員

会場　関西学院大学第2教授研究館第2研究会室

この例会の企画は進藤修一会員から「森岡会員が1月中旬に帝国大学の最初の女性卒業生の調査で関西学院大学図書館に来館」の連絡をうけたときから始まった。森岡会員が関西学院大学にこられたさい、直接、史料収集状況の説明をうけた結果、史料を一度整理して中間報告のかたちで研究発表をおこない、女性高等教育史の専門の会員から問題点を指摘していただくことは意味があるのではないかと考えるにいたり、さっそく、関西学院大学において例会を開催する件を事務局に提案した。例会当日は関西学院大学から図書館、産業研究所、学院史編纂室の関係者多数が出席された。また湯川会員と坂本会員がコメンティターとして遠路東京から参加された。研究発表の内容についてみれば、決定的な史料の不足から推量で論じられる部分がなお少なくなかった。予定されている2月後半以降の台北における史料調査の成果に期待したい。参加者は次の通り。会員9名:井上琢智、古屋野素材、坂本辰朗、辻学、鳩澤歩、福井幸男、森岡ゆかり、湯川次義、早島瑛。機関会員1機関:関西学院学院史編纂室(高橋正事務長)。会員外 24 名:井手香奈子氏、川久保美智子氏(関西学院大学社会学部)、小林民子氏(関西学院大学産業研究所)、亀田恵氏、小倉いづみ氏(朝日新聞社)、佐々木薫氏(関西学院大学社会学部)、阪倉篤秀氏(関西学院大学文学